

2020年度経済学部における オンライン授業の取り組み

出原健一 Ken-ichi Idehara
滋賀大学 経済学部 / 教授

経済経営研究所から依頼を受けまして、昨年度(2020年度)の学務委員長として、昨年度の経済学部のオンライン授業の取り組みについて、書かせていただきます。1つの記録として、お読みいただければ幸いです。

1. 2020年度直前～春学期

2020年の3月に入ったところ、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により新学期は通常通りに授業ができない可能性が出てきたため、4月から経済学部学務委員長に就任することになっていた私は、学務委員の先生方とともに、どのような実施形態にするかの検討に入りました。しかし、正直なところ、このころはまだ、どのように感染リスクを抑えて「対面授業」を実施するかを模索していたのですが、4月に入りさらに悪化していく状況を踏まえ、学務委員会や教授会などで議論した結果、春学期授業の開始を2週間ほど遅らせて、全面オンライン授業を行うことになりました。教員・学生ともに慣れない授業形態でしたが、SULMSのサーバーを強化したこともあり、目に見えた形では大きなトラブルはありませんでした。タブレットやパソコンを所持していない学生に対しては大学から貸与する処置も行いましたが、周知をHPなどの電子通信手段で行わざるを得なかった、というある種矛盾した対応だったため、その情報自体が届かない学生もいたであろうことは反省点です。

実際に行われた授業形態としては、講義科目の6割以上がオンデマンド型で、学生にとっては好きな時間に視聴でき、見返すこともできるという点では好評でした。教員への質問・相談もSULMSやSUCCESSのみならず、TwitterやLineなどをうまく活用した教員も見られました。対して語学やゼミなどの比較的少人数のクラスでは、初期の段階からZoomやTEAMSを活用した、双方向リアルタイム型の授業が多く行われました。

6月からは、感染状況を注視しながら、ゼミなどの一部の少人数授業に対し、対面授業を許可しました。マスクの着用はもちろん、教室では十分な距離をとって着席してもらい、座席番号の記録を義務付けるなど、感染リスクを最小限に抑えた上で実施し、遵守してくださったおかげで、大きな問題は起こりませんでした。しかし、その処置も学期末試験の前までで、試験はすべてオンラインでお願いすることとなりました。試験提出期限直前にアクセスが集中し一部の学生が時間内に送信できなかったなどのトラブルが起きてしまいましたが、通信トラブルによる遅延と思われるケースは担当教員に配慮をお願いするなどの対応を行いました。提出の時間帯を分散してもらうなど、今後に向けての対策も講じました。

2. 夏季休業期間～秋学期

春学期が終わった時点では、秋学期の授業形態をどうするかを決めることはできませんでしたが、いくつかの可能性の検討を進める一方で、教員に対し授業形態に関する希望調査を行いました。また、対面授業に備え、少しでも飛沫感染を抑えるために、教卓用のアクリル板を購入・設置しました。これは入試の際にも役に立ったように思います。

状況を見極めるため、詳細な授業形態の最終判断が少し遅くなってしまいましたが、「滋賀大学対応指針」に基づいた上で、特に1回生が大学に来られるよう、秋学期からは対面授業を一部解禁しました。大人数の講義科目に関してはできる限りオンライン授業を要請したものの、特に1回生が受講する語学・体育などを中心に対面授業を認めました(結果として、オンライン授業は経済学部では6割程度となりました)。感染防止策としては、教室の出入り口などに消毒液を準備したのはもちろんのこと、ラッシュ時の通勤・通学を避けられるよう1限の対面授業を原則禁止にする、教室では市松模様に着席させる、などの策を講じまし

た。また、学生に貸与する電子機器を春学期より増やすことで、希望した学生には全員貸与することができました。

学期末試験は1限の対面試験を禁止にした以外は各教員の判断に委ねましたが、結局、対面試験はさほど多くなく、オンライン試験においてもほとんどトラブルは起きませんでした。

3. お詫びとお礼

1年を通して、学務委員長の不手際のせいで、細かい点では余計なご不便をおかけしたことも多かったかと思えます。しかし、クラスターなどの大きな問題が生じることなく2020年度を終えられたことは、先生方や学生の皆さんのご協力があったからです。個人的には、学務委員の先生方、そして学務課教務係の皆さんに大変助けていただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

4. 今後に向けて

2021年度入学生からは、ノートパソコンなどの電子端末を持参して学習するBYOD (Bring Your Own Device) を推奨しています。データサイエンス学部では以前から打ち出していた方針ですが、今後オンラインのメリットを生かした授業も増えることも想定して、経済学部でも採用することにしました。そのせいか、私が担当している1回生の英語のクラスではノートパソコンを開いてノートをとっている学生が増えています。新型コロナウイルス感染症感染拡大がきっかけで始まったオンライン授業ですが、今後収束したとしても、オンラインを活用した授業がなくなることはないでしょう。そこで最後にオンライン授業の展望と課題について簡単に述べておきたいと思えます。

オンライン授業の大きな利点の1つは、距離的な垣根がなくなったことでしょう。国内のみならず(時差の問題はありますが) 海外ともリアルタイムで接続して

授業を行うことができます。例えば、2020年度秋学期に開講された、荒谷和秀先生による「プロジェクト科目B Global Business(Trading Company)」という授業では、世界各国のゲストとZoomでつなぎ英語で学生に議論させるということが行われ、受講生にも大好評でした。学生のニーズに応えながら、このような多様な形態の授業を企画し提供していくことが大学に求められていくことでしょう。

その一方で、対面授業の利便性も当然ながらあります。例えば、学生にとって、授業終了後に少し確認・質問したいことがあった場合、対面授業ならすぐに教員に訊くことができます。メールでわざわざ訊くようなことでもない、「雑談」レベルのものならなおさらです。このような「雑談」から話が膨らみ、ゼミのような少人数クラスであれば近くにいる学生も巻き込んで議論が発展していく、というのはキャンパスライフの醍醐味の1つでしょう。

対面授業とオンライン授業をどのように組み合わせさせていくか。なかなかの難問ですが、取り組み甲斐のある問題でしょう。